

# 青春、原作への誘い

日野 笙子

あることをする、そうすることでしか引き替えにできない苦悩が人にはある。忘れること、捨て去ること、そうできない痛恨が人の歴史の闇には存在する。私はある作品に出逢いそれがなんだか知ったような気がした。八十年代の始まりだった。

映画から原作へと、若い頃、取り憑かれるように読んだ作家を一人挙げてと問われれば、私は文句なしにウイリアム・スタイロンと応えるだろう。もとよりアメリカ文学はあまり馴染まず、もっぱらヨーロッパの翻訳本に傾倒していたのだが、一九八三年、公開されたこの映画を観た直後、原作者のそのすべてを読破したい欲求にかられた記憶がある。若さにはよくある衝動なのかもしれない。そのストーリーはあまりに切なく、悲しかった。たぶん今の私にはちよっと疲れる主題だと思う。けれども、青春期に出逢った本や映画は特別だ。今も尚、色褪せることのない情景として心に残る。

この作品は一九四七年のブルックリンが舞台だ。ホロコースト、アウシュビッツ強制収容所から生還した人間のドラマだ。二十二歳の作家志望、スタイロンの若かりし頃を彷彿とさせる青年ステインゴが、地方から出てきて、ある美しいポーランド女性と、その恋人の才気あふれるユダヤ人ネイサンと下宿のアパートで知り合う。ステインゴは若い純粋な情熱のままこの二人に惹かれていく。奇妙で不思議な三人の交流を軸に物語は展開する。メリル・ストリープ、ケヴィン・クライン、ピーター・マクニコルが主演を演じる。三者の入神演技は言うまでもない。画面から鬼気迫ってくるようだった。

セピア色の回想シーンがこの映画の根幹をなす。徐々に明かされていくソフィアの陰鬱な嘘の数々。そしてネイサンの狂気。ブルックリン橋のきらめく夜に、エミリー・デイキンソンの詩の一節が浮かび上がる。詩の暗示のようなソフィアとネイサンの最期。カタストロフィーの壮大で複雑な運命の糸が織りなすのだ。恋愛、絶

望、デカタンズ。光と闇の交錯するカメラワークもよかった。

反戦映画や人種差別ドラマというより、むしろ私は人間の禍根や原罪のなまなましさを、リアリズムの映像の中にそれを感じとってしまった。詩的な映像世界というより重層で複雑な散文的世界として。

修辞学にさほど詳しいわけではないが、こう言ってみたい。メタファー（隠喩）としてのロマンではなく（もちろん物語の随所に伏線が文学としても盛り込まれているのだが）、誰にも代わるることのできなかったソフィーの選択は、個人のメトニミー（換喩）としての描写であり同時にドラマティックな出来事なのだ。だから小説としての細部が映像の描写と現実界に隣接し、手応えのあるリアリティそのものとして心を揺さぶられたのではないのか。歴史の事象の提示といい、人物の名称といい、そこで描かれる世界は詩情あるメタファーと言うより、メトニミー中心の散文的なひろがりを示していたと私は思う。

ソフィーは強制収容所に向けて移送され、軍医の気まぐれな命令で地獄のような苦悩に遭遇する。

「おまえはポラ公女だな、おまえもまた女共産主義者か？」そして「ユダ公じゃないなら、特権を与えてやる。選択の特権をな」と。ポラ公とはポーランド人、ユダ公とはユダヤ人に対する蔑称だった。

ナチスは歴史上の悪の権化だが、現代だって、特権意識を持つ人間ほど怖いものはないと私は思うのだが。隣接する史実として、日本軍による従軍慰安婦問題を私は何故か想起してしまう。未解決の最近のニュースとして報道されたからだろうか。ややこしい理屈は抜きに、現実の闇は深い。底辺に生きる人間は、ときに地獄の選択を迫られるのだから。生きている人間が一番残酷なのかもしれない。そういう意見の時折聞いたりもする。

私の知り得る知識などは、雑誌や新聞そしてネットの範囲を超えるものではなかった。それでも「ソフィーの選択」を書いたスタイロンは当時の私には驚異の作家だった。

「ソフィーの選択」は絶版になっていた。そして私の本当に数少なくなった蔵書の中に残った。装丁の帯にある黄ばんで褪せた映画の写真、ワンシーンがとても目立つ。「愛とはこれほどまでに激しく哀しいものなのか」。今では気恥ずかしい台詞が入っている。

映画や本の感動はそれぞれなのだろう。世界は見るまなざしにおいてさまざまなのだという自明なことを、身近な人の死や、死にゆく人の孤独に連れ添うことを多々経験してみても感じた。それは人生そのものに帰納されてくる、まさに悲しみなのだと思います。まるで末期の人のまなざしを受けけるように、心に染みてくるのだ。

ソフィーには壮絶な過去がある。そしてネイサンは才能豊かだがすでに精神病だ。彼らは人との交流もどこか不通なのだ。そんな二人に惹かれた主人公ステインゴは、やがてソフィーへの愛情を救済という形に展開させようとする。ステインゴの独白によって物語は進行するのだが。そんな主人公の青年は、どこか滑稽で狂言回し的な役に描かれていた。多感な作者の青春の恋の遍歴も垣間見えて、若い時分の人の感性に親和性があるのも肯ける。

一方で、私は原作でしかわからないことがあると思った。反ユダヤ思想、つまりナチス信仰の環境で育った彼女は、生き延びるために、子どもを救うために数々の嘘をつく。子供の選別を迫るナチの軍医にも、アウシュビッツの軍隊長ヘスにも媚態を示す。捕らわれる以前などは、レジスタンス運動に加わりながらも、わが子をゲシュタポから守ろうとして、屈することのなかった友人ヴァンダを裏切る。当時の恋人ヨーゼフはゲシュタポに捉えられる。のどをかき切られ殺されるのだ。

ソフィーの父親は反ナチどころか……。父親の弟子である夫も母親も大学教授の父のいいなりだった。そしてソフィーの一家は皮肉にもそのナチに殺される運命を辿る。ソフィーはもともとお人好しというか、おとなしい内気な女性だった。父親の、ソフィーに対する精神的な虐待にはつきりとした自覚が持てなかった。必死に耐えてはいたが、意思表示することもなく成人し、二児の母となるのだ。一方で父親の秘書的な務めもしながら。そこにホロコーストから生還できたわけがあったのかもしれなかった。一家を皆殺しにされながら、積極的ではなかったにしろ彼女は根強い差別意識を隠せなかった。

ソフィーの成長する過程は、そういう親を持つ異常な緊張の成育史でもあったのだ。回想の中で、彼女は父親やそれを取り囲む人たちを本当は怖れ憎悪していたことがわかる。これほどの体験をして罪責感を持たぬものはいない。時代の悲劇なのだからソフィーの選択は彼女のせいではないと思うのが通常感覚だろう。けれども、そうとばかりは言えない、自ら意識できないところにすぐれて人間的なリアルがあると思は思う。原作に惚れ込んだわけはどうやらその辺にあった。同時にまた

こういう感想も私は抱いている。自分が正義だとか正しいとか、また一つの信仰のもとでもわかってしまう人達が私はとても怖い。そんな傾向を持つ権威的人間の、強者に対する謙虚さも従順さも、美德どころかポーズとりに見えてしまう。何事にも自信が持てなかった穿った私の見方なのかもしれない。

作中のネイサンと言う人物は、人間社会の欺瞞や複雑な心理の機微もわかってしまふ天才の狂気をあわせ持っていた。時に熱情的に、時にサディスティックなまでに。ソフィーとネイサン、二人の死は必然だったと言えよう。

スタイロンの作品には他にも「闇の中に横たわりて」(一九五一年)や「ナットターナーの告白」(ピューリッツァー賞 (一九六七年))そして「見える暗闇」(一九九〇年)など、もちろん大作ばかりだ。やがて死すべき人の世に生きて、まさに宿命の一作、私の青春期にとりわけ衝撃的だったのは「ソフィーの選択」であったことは言うまでもない。

〈了〉